

14日 火曜

エステル

2:12 おとめたちは、婦人の規則に従って、十二か月の期間が終わって後、ひとりずつ順番にアハシュエロス王のところに、はいって行くことになっていた。これは、準備の期間が、六か月は没薬の油で、次の六か月は香料と婦人の化粧に必要な品々で化粧することであつた。

2:13 このようにして、おとめが王のところにはいって行くとき、おとめの願うものはみな与えられ、それを持って婦人部屋から王宮に行くことができた。

2:14 おとめは夕方はいって行き、朝になると、ほかの婦人部屋に帰っていた。そこは、そばめたちの監督官である王の宦官シャアシュガズの管理のもとにあった。その女は、王の気に入り、指名されるのでなければ、二度と王のところには行けなかつた。

2:15 さて、モルデカイが引き取つて、自分の娘とした彼のおじアビハイルの娘エステルが、王のところにはいって行く順番が来たとき、彼女は女たちの監督官である王の宦官ヘガイの勧めたもののほかは、何一つ求めなかつた。こうしてエステルは、彼女を見るすべての者から好意を受けていた。

2:16 エステルがアハシュエロス王の王宮に召されたのは、王の治世の第七年の第十の月、すなわちテベテの月であった。

2:17 王はほかのどの女たちよりもエステルを愛した。このため、彼女はどの娘たちよりも王の好意と恵みを受けた。こうして、王はついに王冠を彼女の頭に置き、ワシュティの代わりに彼女を王妃とした。

2:18 それから、王はすべての首長と家臣たち



Bible Reference
聖書の記述

の大宴会、すなわち、エステルの宴会を催し、諸州には休日を与えて、王の勢力にふさわしい贈り物を配つた。

2:19 娘たちが二度目に集められたとき、モルデカイは王の門のところにすわっていた。

2:20 エステルは、モルデカイが彼女に命じていたように、まだ自分の生まれをも、自分の民族をも明かしていなかつた。エステルはモルデカイに養育されていた時と同じように、彼の言いつけに従つていた。

2:21 そのころ、モルデカイが王の門のところにすわっていると、入口を守つていた王のふたりの宦官ビグタンとテレシュが怒つて、アハシュエロス王を殺そうとしていた。

2:22 このことがモルデカイに知れたので、彼はこれを王妃エステルに知らせた。エステルはこれをモルデカイの名で王に告げた。

2:23 このことが追及されて、その事実が明らかになつたので、彼らふたりは木にかけられた。このことは王の前で年代記の書に記録された。

王妃になるために他の「おとめ」たちは、この機会を逃さないようにと、最善のことをしました。「王のところに入って行くとき、…願うものはみな与えられ」たので、自分を魅力的に見せるために、最大限のものを用意したことでしょう。しかしエステルは、自分からは何も求めませんでした。見せかけのものは空しいと知っていたからか、または全てを神様に任せていたからでしょう。そして結局そのようなエステルこそが、「すべての者から好意を受け」たのです。ここに主に従つて生きる女性の魅力があります。男性もまたそのような女性のすばらしさに気づくべきでしょう。

そしてそのようなエステルが「王の好意と恵み

を受けた」のです。そこでもエステルは「モルデカイに養育されていたときと同じ」と謙遜であり続けました。主はモルデカイに王を守るよう導きを与え、後に彼とエステルを用いられました。神を信じないこの世の中にあっても、信仰の徳を持ち続けましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

